

氏 名 長田 直子

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第1308号

学位授与の日付 平成22年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 「近世後期の在村医療—医療者と受療者からみた
多摩地域医療—」

論文審査委員 主 査 教授 山本 光正
准教授 松尾 恒一
名誉教授 塚本 学
(国立歴史民俗博物館)
教授 青木 歳幸 (佐賀大学)

論文内容の要旨

本論文は、近世後期（18世紀・19世紀）の多摩地方における医療の実態について、医療者と受療者の双方から、とくにその関係性を踏まえて検討したものである。これまで、どちらかという医療者側の史料を使った研究がほとんどで、受療者側の史料を使った研究は少なかった。本論文は、一地域内の両方の史料を分析することで、その相互の関係性から近世医療の特色を描こうとした点にオリジナリティがある。

序章では、戦前以来の先駆的な医学史から説き起こし、1980年代の蘭学史研究（とくに在村蘭学の研究）からつながる1990年以降の在村医療に関する研究状況を整理し、一地域をフィールドとして在村医療の実態を検討する本研究の意義について説明している。とくに江戸近郊に位置し、江戸の医師との関係から新しい医療技術・知識が入ってくるだけでなく、幕府領・藩領・旗本知行所・寺社領などが錯綜する非領国地帯である多摩地方をとりあげることで、御用医師によって支えられる藩領国の医療の事例ではなく、地域社会において自らの実力で評価を勝ちとり、経営としても自立しながら在村医療を進める事例を検証しようという点に特色を見いだそうとしている。

第1章では、18世紀初期に多摩地域の記録に現れる医師が、中期以降村落に定着しながら医療活動を行い、19世紀に急増していく過程を追った。そのうえで、医師の増加にも関わらず、寺社（たとえば大悲願寺＝多摩郡横沢村）や宗教者による加持祈祷・護符や「妙薬」の配布などの行為も継続すること、神主・禰宜家（府中六所神社）などから医師が輩出されること、医師と宗教者との関係が分業的なものであることなどを実証している。しかし、そのなかで、19世紀には、蘭学を学んだ在村医師が着実に医療活動を展開していくのである。

第2章では、武蔵国北多摩郡府中領下谷保村の産科医本多覚庵が記した「本多覚庵日記」から、覚庵と弟子たち（とくに本多雖軒・福田卯斎・青木省庵）を含めた医療活動全般について詳細な分析を行っている。ここでは、村役人でもあった在村医覚庵の医療活動・文化活動および医師養成活動を丁寧に分析し、弟子の代診も含めるとその医療範囲が周辺村落に留まらず2里を越える範囲に及ぶこと、漢方だけでなく西洋医薬も用いていること、他村にも医師が増加するようになるとその診療範囲を縮小していくことなどを明らかにしている。さらに、3人の弟子の修業・開業過程を分析し、明治にかけて活躍する次世代の医師たちがどのようにして生み出されたのかについての貴重な事例を紹介している。

第3章では、地域に密着した医療を行った多摩郡柚木領下落合村の小山家に残された医学関係書や「御薬配剤帳」から、その医療行為の特色について考察している。八王子千人同心・村役人であり文化人でもあった同家の医療活動の特徴は、本多覚庵に比べると在村性が強く、弟子も養成せず、基本的には漢方医にとどまるというだけでなく馬医も兼ね続けるという点にあった。明治以降は、医師ではなく牛馬の薬を製造・販売する道を選択することになる。

続いて、藩領国における医師と比較するために、二つの補論を設定し、常陸土浦藩領の辻家の医療修行と医療活動の実態、駿河田中藩領内の医師たちの実態について考察している。後者では、田中藩の御用をつとめるとはいえ、実際に町に居住する医師としての医療活動の広がりや地域での評価、地域の医師たちとの関係を分析し、地域医療と関わるなかで地域の医師たちとの連携が生まれる側面について検討している。また、前者の辻家では、修行先華岡青洲の医術写本を模して独自の医療記録「寄患図下書」を作成しているが、これについての丁寧な分析を行い、華岡流外科手術および麻酔方法（薬）

についての新たな事例を発見している。

1～3章と二つの補論が医療者側の史料を用いて医療の実態を明らかにしようとしたのに対し、第4、5章は、受療者側の史料を用いて受療者の視点から医療のありようを描こうとしたものである。第4章は、八王子千人同心である石川家が残した日記（「石川日記」）から、同家が受けていた医療の実態を明らかにした。18世紀に在村医師が生まれるなかで、その医療活動と宗教者による治病行為、売薬等の活動が、受療者である石川家の人たちにどのように選択、受容されていくのか、どのように使い分けられていくのかについて具体的に考察している。

第5章では、多摩郡日野領柴崎村年番名主を務めた鈴木平九郎が記した「公私日記」から、19世紀の医療のありようについて検討している。鈴木平九郎は、同じ柴崎村名主であった中島家から鈴木家に入って同家を再興する一方、日野宿寄場組合の大惣代など地域の要職を歴任する当地域の有力者（名望家）であるが、天保8年（1837）以降日記をつけている。この日記は、自分や家族の病気とそれに対する治療についての記述があるだけでなく、雇い人などへの治療、村内外で流行した伝染病とそれに対する村・組合での対応についても記録されており、19世紀の多摩地方の医療の実態をリアルに示す好史料である。この日記の丁寧な分析から、同家にとってのかかりつけの医師の存在、病気による専門医の選択、治療が思わしくないときの医師の変更（新たな選択）などについて、その実態を明らかにしている。たとえば江戸における高名な医師や蘭学塾師匠クラスの治療を求める様子などに注目すると、多摩地方の名主家クラスでは医師を選択することが当たりまえであったとさえ言える。逆に言うと、第2章で検討した本田覚庵など蘭方を習得した在村医師たちの治療活動がひろがるとともに、専門の分化がより明確になる一方で、受療者による医師の選択（医師替え）、複数の医師による治療の選択なども行われるようになっていく。一方、医師たちもネットワークを持ち始め、競争（患者を獲得する）だけではなく、情報交換や患者の紹介などの関係を大切にしながら医療活動を行うようになる。その意味では、江戸近郊農村である多摩地方では、医師数も増え、専門医による治療も江戸まで含めるとかなり充実していたことがわかり、このような医師たちのなかから近代の医師となる者も生まれ、地域医療が展開することになる。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、多摩地方に限定してではあるが、18世紀段階と19世紀段階で医療の実態が異なることに注目し、本田家・小山家という二つの医家の史料を丁寧に分析・比較して、①地域における医師のパターンや医師が地域に定着していく様子、具体的な医療行為の中身、弟子の養成過程、あるいは弟子が自立して開業していく過程について新しい事実を明らかにした点、②医師の側からだけでなく受療者の実態（医師の選択も含めて）についても史料を丁寧に分析し、受療者によっては医師を選択する場合もあったという興味深い事例を指摘している点など、史料収集・分析の面で近世地域医療研究に貢献するところは大きい。とくに、同じく歴代村役人を勤める家であり、また文化人としても活躍する本多家と小川家の医療を比較し、前者が馬医からスタートしつつも、その後の修業によって蘭方も漢方もできる医家として（西洋医学書を多く持ち西洋医薬も使いこなす）、養成している弟子をも使ってより広い範囲での漢方のみでの医療活動を行うのに対し、後者では弟子も養成せず、近隣の村の医療にとどまり、馬医も続けることを対比的に示したことは重要な成果である。また、前者では、主要な弟子たちが江戸や長崎へ遊学し、他の医師のもとでの訓練も受けるという経歴を持って自立・開業するというかたちで、医業を明治の新しい医制のもとでも継続させるということを実例として対比的に明らかにした。また、旗本知行所・幕府領が錯綜する多摩地方と一円的な支配が行われている藩領国との間で、医師のありかたがどのように異なるのかということについての比較を補論で試みており、通読すると著者が所領の錯綜地域である多摩地方にこだわった意味も理解できる。一円藩領でこれまで研究されてきた、藩から御用医師に任命されてきたような医師との違いを考えることで、近世の在村医療の到達点を描くという方法は有効であると言えよう。

1980年代以降、急速に研究が進展してきた近世医学史・医療史研究の成果を踏まえ、膨大に残る村落史料のなかから、必ずしもこうした具体的な診療に関する史料が豊富とは言えない医療関係の史料を収集・分析して、この分野での実証的な研究を進めたことは評価できる。とくに、華岡門人である辻元順の医療記録である「日記」・「寄患図下書」の分析から、華岡流医術の麻酔薬通仙散（麻沸湯）を用いた外科手術例を新しく発見した点は医学史上での貴重な成果と言える。さらに、医療を受療者の側、あるいは医療者と受療者の関係からとらえるという視点は、現代の医療問題を考えるうえでも示唆的である。

しかし、いくつかの課題も指摘された。もっとも大きな課題は、「医師」そのものの定義にかかわることである。「医師」とは何か。これ自体は、近年の近世史研究で言われる周縁的身分の問題をも考慮すると、容易に解決できる問題ではないが、審査者の側からは、以下のような指摘がなされた。19世紀初頭以降この地域で「医師と認識される者や本格的な医学教育を受けた医師」が登場し始めるとするときの「医師」は、さしあたり「（庶民を）診療をして投薬する」者と規定できるのではないか。儒医に典型的な文化人医学者から「診療して投薬する」者へという大きな流れのなかで、地域においては、医師が偽医師や新たな外からの医師の流入の取締り、医業向上・薬代不払い対策のために連合する（医師仲間）という事例もある。こうした医師たち自身による連合の問題を、藩によって御用医師に任命されること（藩が医師身分を決める）と、在地社会で医師として認められること、との対比でどのように考えていくか、与えられた課題は重要である。

以上、いくつかの課題も示されたが、医学史研究の蓄積のうえに、医師による医療だけでなく、一地域をフィールドとして、医療を行う医療者側と医療を享受する受療者側の双方の史料から、在村医療史研究という新境地を開拓した点で学術的価値は高いと判断し、審査者全員が博士の学位授与に充分値するものであると評価した。